
NO.5

カワウソ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NO.5

【Zコード】

Z8595G

【作者名】

カワウソ

【あらすじ】

僕はシロ。秋田犬だ。お父さんとお母さんと、そして光君と一緒に暮らしている。僕はもともと死ぬ運命にあった。そこから救ってくれたのが光君だ。僕は自由と幸福を得ることが出来たんだ。光君を、とても愛しているんだ。でも、光君は大学に入ると同時に家を出てしまった。それから、少しずつ家の様子がおかしくなっていつて…何度も何度も「シロはいいな」と光君は言うのだけど、僕の何がいいんだろう?

光君が大学に入学した年に、僕は十三歳になった。この家に迎えられて十三年になつたのだ。

思えば、この時から、僕の周囲で何かが崩れ始めたのだった。

最初に自己紹介をする。僕は犬だ。名前はシロという。僕が真っ白い毛色の秋田犬だから、光君にそう名づけられた。

家族の話をする。まず、「お父さん」がいる。ある大学の生物化学の研究所で働いている研究者らしく、ある分野でとても権威があるらしい。次に、「お母さん」は、当たり前だがお父さんの奥さんで、専業主婦だ。とても穏やかな人で、少し心配性で、深い思いやりの持ち主だ。僕の気持ちもよく考えてくれる。

そして最後に、二人の間の子供であり、僕にとつて「お兄ちゃん」である光君。賢くて優しく、僕を本当の弟のように大事にしてくれる一番の仲良しだ。そして、僕の命の恩人でもあった。

僕は、もともと殺される運命だつたらしい。

僕の生まればはある化学研究所で、新たに開発される薬の被験体になる予定だつたのだ。死ぬ運命に気づかない僕と兄弟たちは、ある日突然、選ばれて連れて行かれた。そして一度と帰つてこなかつた。死への順番がどう決められているか知る由も無く、世話係の人は均等に僕等を可愛がってくれて、幸せだった。僕は犬だから、自分の一生は、幸せであると信じて疑わなかつた。

ある日、ケージの中で兄弟たちとまどろんでいたとき、ふと、一人の男の子が、こちらを覗き込んでいたのに気づいた。まだ小学生にもならないだろう、幼い男の子は、僕をじっと見ていた。僕も、彼をじっと見た。

「この子がいい」

男の子はそう言つて僕を指差した。すると男の子の隣にいた大人に抱き上げられ、そつと男の子に渡された。まだ小さい僕は、幼い男の子の腕の中にもすっぽり包まれた。彼がいっぱいに笑つた。その瞬間、今までに無い幸福感に満たされた。乾いたスポンジが水を吸い上げるよう、喜びが血脈を通つて全身を強く満たした。思わずその顔を舐めると、彼はさらに嬉しそうに笑つた。これが僕と光君の出会いだった。

あとから知つたが、その研究所でお父さんが働いており、「息子が犬を飼いたがっているから、実験用の中から一匹、貰えないかな」ということで、僕がその息子 光君に選ばれたのだった。聞くに、僕は兄弟たちの中で一番器量良しだったらしい。なんにせよ、僕は光君に命を救われたのだ。

僕らはいい友達だった。光君は可愛がつてくれた。僕が最早赤ん坊でなく、外に出られるようになつてからは、早朝お母さんも一緒に、二人と一匹で散歩に出かけるのが日課だった。休日は公園で、ボーリ遊びをするのが楽しみだった。光君は中学生になるとサッカー部に入ったので、お母さんと一緒に試合をよく見に行つた。残念なことに、お父さんは仕事が忙しく大抵来ることができなかつた。光君はお父さんに、試合を見て欲しかつたに違ひない。時々「またお父さんは駄目なんだ」と呴いていたからだ。ならばせめて僕は、と誰よりも光君の頑張つている姿を追い続けた。光君が幼児から少年に、少年から青年へと成長していくのを一番傍で見ていたのは僕だと自負している。

しかし光君が高校生になると、状況は変わってきた。彼は成績が良く、地域でも偏差値トップの高校に合格したので、勉強で忙しくなつたのだ。最初はサッカー部で頑張つていたけど、高校一年生の春に辞め、来るべき大学受験に向けて、予備校に通うようになった。それに伴い、僕の実生活的な世話をしてくれるのは主にお母さんになつた。光君はたまに散歩をしてくれたが、触れ合う機会は激減し

た。寂しかった。昔のように遊んで欲しかった。しかし僕らの関係は変わりつつあり、無邪気にじやれあうことなくなつた。

それでも度々光君は、学校から帰つてから、僕を話し相手にした。庭の僕の家 光君とお父さんが作ってくれた木製の小屋 の傍に濡縁があつた。そこに腰掛けた光君は、僕の頭を撫でながら

「シロ。お前は、わかつてくれるよな」

と、よく言つのだつた。正直あまり光君が求めることをわかつていなかつたのだけど、彼がそばにいてくれることが嬉しかつたから、精一杯尻尾を振つた

そして光君は大学に合格した。冒頭で語つた、僕が十三歳になつた年だ。

東京にある、有名な難関私立大学だつた。合格に向けての光君の一生懸命な姿を僕も家族も見ていたから、とても嬉しかつた。素晴らしい兄貴を持つたと、誇らしかつた。

僕の誕生日が丁度合格発表のあつた三月だつたので、光君の合格祝いをメインに、誕生日パーティーも一緒に開催された。誕生日だからと、普段着ない窮屈な洋服を着せられ、ピエロのような三角帽も被せられた。そんな格好の僕に大はしゃぎのお母さんは、光君と僕のツーショットをデジタルカメラで沢山撮つた。嬉しくて仕方ないといった様子で、僕も幸福だつた。

けれど、たつた一つ、気がかりだつたのは、

「シロは、いいよな……」

光君が、僕の頭を撫でながら、ふとそう呟いたのだった。この時の光君の表情の陰りに気づいたが、幸福感がそれを流してしまつた。実際、犬の僕に何ができるかわからないけど、流してしまつたことは、後悔している。

入学と同時に彼は家を出た。実家から大学までの通学時間が三時間弱かかってしまうため、一人暮らしを自動的に決まったのだ。寂しくてたまらなかつたけど、そのかわりお母さんが一生懸命世話をし

てくれるから、嬉しかった。光君は年末年始や、長いお休みのときに帰ってきたけど、あまり実家に滞在せずに一泊程度してすぐに自分の暮らしているアパートに戻ってしまった。僕ともあまり遊んでくれなくなつた。残念に思つたけど、大学生は忙しいのだろうと、我慢しているうちにあまり気にならなくなつていつた。

一年が過ぎ、光君が大学に合格してから次の、春が訪れた。僕は十四歳になつた。

今年の春は、強い雨が沢山降つたので、桜が今までに無いくらい早く散つてしまつた。泥まみれになつたピンク色の花びらが塊になつて、道路に貼りついているのを見て、何か表現し難い嫌な予感がしていた。

最近、あまりにも家が静かだつた。しかし、かと思えば時折怒鳴り声や、激しい言い合ひが聞こえるのだ。言い合つているのは、お父さんとお母さんだ。それ以外にも、誰かと電話で話しているらしい会話も、聞こえた。泣き叫ぶような声だつた。

「ふざけるな……！」

聞き取れたのは、これだけだ。お母さんの声だつた。何を意味するかも分からぬが、異常な雰囲気だけは感じ取つた。お母さんはそんな乱暴な言葉を使う人ではないはずだ。この春休み、光君は帰つてこなかつた。その事実と最近の家の様子が結びついて、言い知れぬ不安を感じていた。僕自身の体調も、良くなかった。もう若くなく、特に今年の春から体力の衰えがあつた。

ある日の夕暮れ時、お母さんがいつもの散歩のために僕の傍に來た。首輪に紐をかけながら、彼女は言つた。

「シロは……分かつてくれるよね……つづん、シロは犬だから……何も分からぬよね……」

何も分からなかつた。ただ、お父さんもお母さんも光君も、愛しているよと、……僕に言葉があれば、そう言つたと思う。お母さんの表情は悲しみに満ちていて、そこには迷路に迷い込んだような逃げ

場の無い絶望感があつた。どうしていいかわからない、……と途方に
くれてゐるようだつた。力なく紐を引かれ、僕とお母さんはいつも
のようすに散歩に出かけた。何にしても散歩は嬉しいので、はしゃい
だけれども、お母さんは樂しくなさそうだつた。それでは僕もつま
らないので、彼女を樂しませようと、いつも寄る草原で紐を外され
たとき、その脚にじやれついてみた。そうして気づいたが、お母さ
んはいつの間にか、目いっぱいに涙を溜めていた。そして、僕を見
下ろしたまま、笑つた。涙が滑り落ちて僕の額を濡らした。お母さ
んを笑わせたくて、必死に飛び跳ねた。お母さんは、顔を歪めて笑
い続けた。

「シロは、いいね……」

光君があの時言つたことと同じことを、お母さんは言つた。何がい
いんだろう？ 分からないまま草原をかけまわり、誰が捨てていった
か知らないが、泥まみれのネクタイを見つけた。それを咥えて振り
回し、持つていつたけど、「そんなものは捨てなさい」ときつく叱
られてしまつた。

その後も、日常は続いていた。怒鳴り声や言い合い、それとは裏腹
な氣味の悪い沈黙、静寂。それは変わらず繰り返された。何を言い
争つているかもう僕には聞き取れなかつた。言い争いの頻度は上が
つてしまい、激しい声が聞こえるたび、身を縮め、小屋の奥に逃げ込
んだ。そして静けさが訪れると、見えない不安がより一層不安を搔
き立てるのだった。

ある日の午後だつた。昼寝をしていた僕は、門扉の外に人の気配を
認め、目覚めた。来客だろうか？ それとも危険な人物だろうか？ 呟
えようと口を開いたが、すぐに閉じた。

光君だつた。

まず驚いたのは、髪色だつた。黒髪だつた彼の髪は、真つ白になつ

ていたのだ。ずいぶん痩せて顔色もあまりよくなく、不健康な感じがした。だから一瞬、そうだと分からずに、ただじつと彼を見つめた。本当に光君だろうか。

「シロ！」

突き抜けるような、あかるい、声で呼ばれた。

それは間違いない、懐かしい声だつた。一気に嬉しさと、愛情がこみ上^じげる。

「シロ、ただいま」

それに応えて吠えると、彼は笑つた。光君、おかえり。

彼は門扉を開けて庭に入ると、僕の頭を撫でてくれた。嬉しさに飛び跳ねる。

その時、家のドアが開いてお母さんが出てきた。光君を見たお母さんの身体は、凍りつくように固まつた。せっかく息子が帰ってきたのにどうしたのだろう、と不思議に思ったが、彼女が小刻みに震えているのが分かつた。それ以上は愕然として動けないようだつた。白い髪に驚いているのかもしれない。無理も無い、僕も最初はそつだつたのだから。

光君を見ると、さつきの笑顔はなくなつっていた。お母さんを見る目は、冷たく……いや、むしろ激しいというべきで、表現するならば「攻撃的」だつたかもしれない。しかし光君がお母さんを攻撃するわけがないから、僕の見間違いかもしれない。彼らは大した言葉も交わさず、家に入つていつた。帰ってきた人間が家に入つただけなのに、何か言い知れぬ違和感があつたが……僕は庭に残された。

それから、また日常が流れ始めた。光君が家にいてくれて、嬉しかつた。またすぐアパートへ帰つてしまつのではないかと不安だつたが、ずっといてくれた。嬉しくてたまらなかつた。

一週間……一週間……一ヶ月が過ぎ……光君はずつと家にいた。学

校は大丈夫なのだろうか。でも、できるだけ一緒にいたい。光君はたまに僕を散歩に連れて行き、一緒に遊んだ。昔を思い出し、また今一緒にいられることが、嬉しかった。

しかし、それ以外彼はほとんど外に出ないようだった。家には頻繁に宅急便で荷物が届くようになり、中身は主に光君がネットショッピングで注文した本らしかった。お金はお母さんが払っていた。聞くに真つ白くなつた光君の髪は「ストレス」らしかつたが「ただ染めた」とも聞き、実際は分からなかつた。白髪は異様だつたがすぐに見慣れた。似合つていなことも無いと思つた。

何も生活は変わらなかつたが、おかしいのは、せっかく光君が帰ってきたに閑わらず、例の言い争いの頻度は減るどころかむしろ増えるばかりということだ。時には、明け方まで明かりがついて、誰かと誰かが言い争つている。おそらく光君とお父さんであることは間違ひなかつたが……。

ある夕方、退屈していると光君が庭に出てきた。その手に引き紐があつたので、散歩と悟つて嬉しくなつた。いつもの散歩の時間に比べると少し遅かつた。彼は僕の頭をやさしく撫で、僕も尻尾を振る。一緒に外に出ようとしたところで、近所に住んでいるおばさんが家の前を通りかかり、ちらりとこちらに目をやつた。自然な視線の投げ方ではなく、ぱつが悪そうで、それでいて面白白そうな、伺うような視線だった。

「何か用か！」

光君が怒鳴つたので、何もそこまでしなくてもいいのではないかと驚いた。おばさんは「ひつ」と小さく叫んで走つていつた。彼は鋭く舌打ちし、黙つたまま乱暴に紐を引いた。あまりに強い力だったので、首が苦しく、咳き込んでしまつた。

いつもの草原まで連れていかれ、引き紐を外されると、好きに駆け回つた。光君はベンチに腰かけて煙草を吸つてはいる。一緒に遊んでくれなさそうだ。でも一人遊びでも十分楽しい。走り回つてはいる

だけで幸福と自由を感じる。そつやつてひとしきり遊んで満足したので、そろそろ帰る時間かと思い、光君の傍に戻った。紐をつないでくれるのを待つたが、彼はこちらを見たまま、動かない。煙草の煙を吐き出し、吸殻を捨て、火を消す。ふと思い出したように、彼は僕の右耳に触れ、つまむように撫ぜた。

「シロのここと、番号がふつてあるんだよな。……その、生まれた研究所で、誰かにつけられたんだな。五番か……」

初めて聞いた。自分の耳を見るることはできないし、そもそも自分が生まれがどこであったかも忘れていた。五番。何の順番だろう。死ぬ順番だろうか、それとも生まれた順番だったのだろうか。なんにしても、誰かに番号をふられ、予定では薬を飲まされるか打たれるかで死ぬはずだった。しかし、そこから連れ出してくれたのは、光君なのだ。

「きめてくれよ……なあ」

頭を抱えて、か細い声で言った。彼は誰に対し、何を決めて欲しいのだろうか。分からなかつた。

「シロはいいな」

そしていつかの言葉をまた、俯いたまま、呟いた。

そのまま季節は梅雨へ突入し、何日もの間、雨が降り続けた。このまま晴れは訪れないのではないかと想像するくらい、長く降つた。雨の日は散歩にも行けないので、身体がなまり、気分もよくなかった。腐つてしまいそうだった。

ある朝、一週間ぶりに素晴らしい晴天が訪れた。真っ青な空が頭上に広がり、初夏の日差しが眩しく、熱く降り注いでいた。風が生温い。夏日だった。少し暑いが、今日は散歩が気持

ちいに違いない。嬉しくなった。

その時、家中から引き裂くような悲鳴が聞こえた。

飛び上がつて窓の傍に寄つたが、カーテンが閉まつていて中が見えない。また悲鳴だ。叫び声、怒鳴り声……最初の悲鳴はお母さんのものだつた。物が倒れ、ガラスが割れるような音がする。ドタドタと人が組み合つているような音もした。その異様さに僕の身体はこわばつて、動けなくなつてしまつた。日差しが熱い。

どれぐらい物音が続いていただろう。やがて、静かになつた。いつも、言い争いの後に静寂が訪れるように……しかし、今度の静寂は、もつと容赦の無い、まるでそこに誰もいなくなつてしまつたような氣味の悪いものだつた。何があつたのだろう……。

その時、家のドアが開いた。ほつとして、金縛りから解き放たれる。家から出てきた人物を見た。

光君だつた。

しかし、本能的に、「これは光君ではない」と感じ取つた。

彼は、ゆっくりと外に出ると、僕の前までやつてきた。夏日の光に射された顔色はくすんでいて、どこか虚ろな表情が漂つている。それなのに目は油をさしたように、力強く光つているのだ。そのねばつくような力強さに、身構えた。表し難い異様な攻撃性を感じ取つたのだ。まるで彼は別人のようだつた。彼のにおいは、僕の知つてゐるものではなく、……生臭い、生ぬるい、肉のにおいがした。彼は白地に真つ赤な模様の服を着ており、手には赤く濡れた包丁が握られていた。その服と刃物から、嫌な匂いがするのだつた。白い光が白い刃に反射して、その赤いものが血であることがわかつた。緊張感が走つた。

「シロ、殺した」

光君は言つた。殺した。誰を。言わなくても分かつた。

彼は口の端を上げて、笑つた。

僕は吠えた。生まれて初めて、光君に吠えた。彼は絶望したように目を見開いた。僕は吠え続けた。彼は顔を憎しみに歪め、次の瞬間には脚を振り上げ、僕のわき腹を蹴り上げた。悲鳴を上げた。また蹴られた。今度は頭だ。意識が飛びかけた。僕も光君に殺されるのだろうか。

そのとき庭の外から悲鳴がした。この前家をのぞきこんだ近所のおばさんだった。「誰か！人殺し！」おばさんは腰をぬかしながらも、よろめくように助けを求めに行つた。

光君は僕を蹴るのをやめ、走つていくおばさんの背中を見ながら、突つ立つていた。手から包丁が落ちた。季節はずれの暑さと光は、じりじりと僕等を照らしていた。影の色が、真っ黒だった。

救急車に運ばれたお父さんとお母さんの傷は深かつた。が、幸い命を落とすまでにはいたらなかつた。光君は警察に捕まり、取調べを受けたあと、病院に入れられた。

いろんな人がたくさん家にやってきて、彼等の話を聞いていると、「親子関係の歪み」とか「優等生の鬱屈」とか「毒になる親」とかいう言葉が頻繁に出てきた。繋ぎ合わせると、優等生で優しすぎた光君は、親の期待を一身にうけ、何でも我慢してしまい、人一倍孤独で、誰にも自分の悩みを話すことが出来なかつた…ということらしい。お父さんとお母さんが望む大学に入ったものの、「何をしたいか分からぬ」とよく言つていたそうだ。大学の友達とも疎遠になつてしまつたようで、やがて授業にも出なくなつた。

僕は光君の側にいたのに、彼のことはなにも分かつていなかつたのかもしれない。光君が僕によく言つた、「シロはいい」を思い出した。彼は僕をうらやましがつたのは、僕が運命の決まつた犬だからだろうか。お母さんも同じことを言つた。皆、そんなに僕がうらやましかつたのだろうか。確かに僕は幸福だつた。でも、それはみんなが僕を愛してくれたからだ。十四年一緒に暮らし、そばにいた。彼は自分の運命を、こんなふうにしか、決められなかつたのだろう

か。いや、僕は光君が自分で自分の運命を逃げずに決めることが出来るはずだと信じている。お父さんもお母さんも、そして誰より光君を、僕は愛している。

一ヶ月して、お父さんとお母さんが退院した。一人と一匹で、一緒にまた、暮らし始めた。光君は、まだ、いない。
僕は、光君が帰ってくるのを待っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8595g/>

NO.5

2011年1月16日02時47分発行